

論文

不登校生徒の SNS コミュニケーションを介した 性トラブルに関する研究

—— クラスタ分析から抽出された「ハイリスク群」の解析と考察 ——

山田 智子

〔抄録〕

本稿の目的は、一部の不登校生徒による、X (旧 Twitter) 「# 不登校さんと繋がりたい」から抽出された文言を解析することにより、不登校生徒の SNS・ネットを介した性トラブルリスクについて検証することである。

わが国の不登校生徒数は、過去最多を更新し続けている。現代の不登校生徒にとって、ネットや SNS での見知らぬ他者とのやりとりは、貴重な「居場所」とであると同時に、その性トラブルリスクについても検討が必要である。

そこで本稿は、一部の不登校生徒による X (旧 Twitter) 投稿「# 不登校さんと繋がりたい」の文言データを解析した。クラスタ分析の結果、「相談」「学校」「死」といった、性トラブルや犯罪リスクの高い、「ハイリスク群」が抽出された。また、「ハイリスク群」の投稿は、「ハイリスク群でない」投稿と比較し、急速に SNS 上で個人的なやりとりを求める投稿が明らかになった。不登校生徒の性トラブルリスクに関する議論と検討の必要性が示唆された。

キーワード：不登校，SNS，性被害，性トラブル，性教育

1. はじめに

筆者は、以前助産師として地域・臨床で活動を行っていた。この際、不登校生徒の「望まない妊娠・分娩」や、育児支援のケースに携わった。また、助産師は、学校や地域において「望まない妊娠」「性被害予防」といった「性に関する教育」も担っており、これまで約 30 校の中学・高校で「性に関する教育」を実践した。しかし、このような「性に関する教育」は、学校に通える生徒には実践ができて、不登校にある生徒や、何らかの事情で学校に通えない生徒には実践できないケースが大半であった。

さらに、本稿の先行研究 (山田・原 2022) ⁽¹⁾ において、一部の不登校生徒が、SNS サービスの 1 つである X (旧 Twitter) ⁽²⁾ で、「# 不登校さんと繋がりたい」と連日投稿されていることが明らかになった。これらの投稿には、「繋がりたい」といった文言に加え、自己の学齢・性別・居住地域・自撮り写真・自己の詳細なプロフィールといった性トラブルリスクの高い文言も散見された。そこで本稿の目的は、一部の不登校生徒による X (旧 Twitter) 「# 不登校さんと繋がりたい」投稿の文言の解析・分析より、不登校生徒の SNS を介した性トラブルリスクについて検証・考察を行うことである。

ここでなぜ、「一見人との繋がりを絶っている ⁽³⁾」(吉井健治 1998) 不登校生徒が、SNS で見知らぬ人と「繋がりたい」のか。先行文献から検討すると、羽淵一代 (2022) は、家族関係、友人関係、学校などの日常的な生活の場における居心地が良くない場合、それらの空間以外へと人間関係を拡大していく若者の存在が確認されてきたと述べている ⁽⁴⁾。さらに、児童精神科医の関正樹 (2023) は、思春期から青年期の友達関係で、同調圧力の高いチャムグループのような仲間集団でつまずいたときに「居場所」となりやすいのが ⁽⁵⁾、X (旧 Twitter) であると指摘している。思春期の生徒にとって、同世代で、同じような趣味・価値観を持つ「仲間との対話」や「交流」は、発達段階を獲得していく上で欠かせないものである。このため、一部の不登校生徒が、学校以外の「空間」を拡大し、ネットや SNS で「顔の見えない」交流を行うことは、貴重な「居場所」のような役割を示すと推測する。

この一方で、中高生の SNS を介した性トラブルは、社会問題になっている。警視庁 (2022) の最新調査によると、「SNS に起因する事犯の被害児童数」は高止まりの状況にある ⁽⁶⁾。さらに注目すべきは、殺人・誘拐などの「重要犯罪」に関しては、年々増加の一途にあることである。これに加え、X (旧 Twitter) は、現時点で中高生の性被害が最も多いことが報告されている ⁽⁷⁾ (警視庁 2021)。このような問題意識・背景から、学校といったリアルな「居場所」を失い、SNS 上で強い「繋がりを求める不登校生徒の SNS 投稿のプロセスや、これを取り巻く性トラブルリスクについても考察につなげたい。

本稿が、まだ知見の少ない「不登校生徒の SNS コミュニケーションを介した性トラブルリスク」について、議論・検討がなされることに加え、不登校生徒の SNS やネットを介した他者との交流にあたり、その「性と生」を守る一助となれば幸いである。

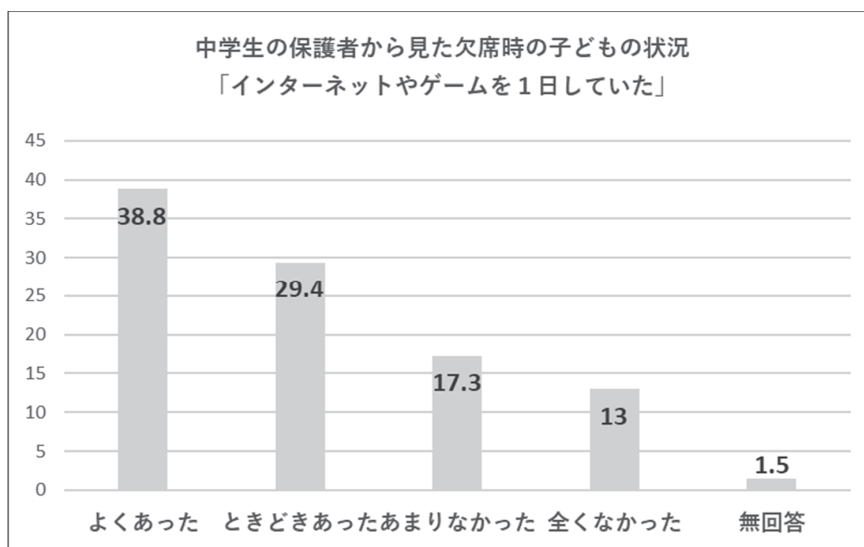
2. 背景と先行研究

1) 不登校生徒の現状と SNS・ネットコミュニケーション

近年、わが国の不登校児童生徒数の増加は著しい。文部科学省 (以下文科省) の最新調査によると (文科省 2022)、小・中学校における不登校児童生徒数は、24 万 9000 と過去最高を更新している ⁽⁸⁾。さらに、この約半数以上が 90 日以上長期欠席であり、学校内外の専門機関等で

相談・指導を受けていない小・中学生は約4万6000人以上にのぼると報告されている⁽⁹⁾。これを受け、文科省は、「誰一人取り残さない学びの保障」に向けた「COCOLOプラン⁽⁹⁾」等の各機関の対策を掲げている(文科省2023)。一方で、「不登校児童生徒の中には、家庭で多くの時間を過ごしている児童生徒がいる。教育支援センターや、民間の団体に在籍している児童・生徒についても、実際にはほとんど通えていない場合がある」(文科省2017)とも指摘されている⁽¹⁰⁾。

ここで、この「家庭で多くの時間を過ごす児童・生徒」について、文科省が、保護者対象に調査を行った不登校生徒の「欠席時の子どもの状況」(文科省2021)がある⁽¹¹⁾。これをみると、欠席時の子どもは、「インターネットやゲームを1日中していた」が68%であった(図1)。さらに、「インターネットやSNSを通じて知り合った人と交流していた」は、「全くなかった」が半数を占めるものの、「よくあった」「時々あった」を合わせると30.6%であった。



(図1) 文部科学省(2021)「不登校児童生徒の実態調査 結果」から筆者作成

近年、不登校生徒数の増加の一方で、学校以外の学びの場や、同世代の思春期の仲間との交流が困難な状況にある。また、不登校になってすぐ、教育支援センターや、フリースクールに通えるケースも容易ではないと考える。このため、家庭で多くの時間を過ごす不登校生徒は、物理的にネットやゲーム・SNSに触れる時間が多いと推測される。さらに、児童精神科医の関正樹(2023)は、不登校生徒の「学校に行きづらいから、“回避的”にネットやゲームをしている」⁽¹²⁾心理も指摘している。また、この不登校生徒が「回避的によく利用する」近年のオンラインゲームは、SNS上で仲間と交流をすることでゲームの攻略につながる⁽¹³⁾とある(関2023)。

以上のような背景・要因から、主に学校で、リアルな友人や仲間との交流が極端に減ってし

まった一部の不登校生徒は、ネット上で「繋がり」を求め、SNSで「#不登校さんと繋がりたい」といった投稿が存在すると推測される。今後、不登校生徒にとって、ネットやSNSは、「学びの確保」「学びたい時に学べる環境」(文科省 2023)⁽⁹⁾ や他者との交流にあたり、さらに重要な「ツール」になるといえるだろう。この上で、不登校生徒の「#不登校さんと繋がりたい」といった友達募集の投稿に加えオンラインゲームや趣味と並行して利用される、SNS・ネットを介したコミュニケーションやその性トラブルリスクについて検討が必要であるといえる。

2) 中高生や若者の X (旧 Twitter) にまつわるコミュニケーションの特徴

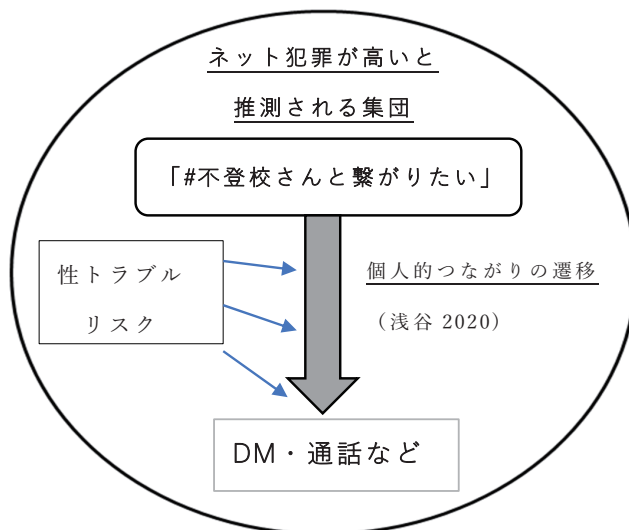
一部の不登校生徒が、「#不登校さんと繋がりたい」と投稿する、SNS サービスである X (旧 Twitter) は、そのコミュニケーションのプロセスや特徴・匿名性などから、中高生の性被害の多さも問題とされてきている。まず、X (旧 Twitter) そのものの特徴として、桐村喬 (2019) は、人々の X (旧 Twitter) の投稿には、140 文字で入力されるテキスト・URL・画像・位置情報などから、ユーザーが日々の中で感じたことや考えたことなど、多様な情報が含まれており、そこから読み取ることができる感情や行動、文化、流行なども間接的に含んでいると述べている⁽¹⁴⁾。

さらに、この X (旧 Twitter) での投稿をおこなったユーザーのフォロワー⁽¹⁵⁾ が、この投稿をリポスト⁽¹⁶⁾ すると、このような投稿はさらに多くの、世界中のユーザーに拡散される。これが X (旧 Twitter) の「拡散性」と、拡散性が強いにも関わらず「匿名性」があることの特徴である。

この一方で、浅谷公威 (2020) らは、「X (旧 Twitter) は、同じ趣味を持つクローズドな人間関係の構築に一定の役割を果たしているが、犯罪性が高いと推測される集団が存在し、それらの集団は、ネットワークの構造解析で、データとして検出できる」と述べている。さらに、X (旧 Twitter) でのコミュニケーションには、オープンな「コミュニケーション」から、「クローズドなコミュニケーション」に移る「遷移」があり、友人同士の親密なメッセージや、犯罪や危険性の高いメッセージは、クローズドな場で行われることを明らかにしている⁽¹⁷⁾。

この浅谷 (2020) の分析を、本稿で分析を行う X (旧 Twitter) 「#不登校さんと繋がりたい」の投稿から考察すると、まず、投稿者側の「#不登校さんと繋がりたい」といった不特定多数を対象とした、「オープンなコミュニケーション」から、検索やプロフィールから繋がった、より個人的で親密な「DM (ダイレクトメール)」、「遷移」「プロセス」に至るクローズドなメッセージにおいて、犯罪や危険性の高いリスクが生じると推測される (図 2)。

このような X (旧 Twitter) による「検索」を通じた性トラブル事件として、2017 年女子高校生 3 人を含む 9 人の若い女性が、X (旧 Twitter) のハッシュタグを通して知り合った加害者から監禁・暴行殺害された「座間市男女 9 人殺害事件」が記憶に新しい (渋井哲也 2019)⁽¹⁸⁾。さらに、東京新聞 (2022) が行った加害者への取材によると、加害者は、「悩みを抱えている人は簡単に口説けた。だから『さみしい』『つらい』とか X (旧 Twitter) でつぶやいている人に



(図2) X (旧 Twitter) における犯罪性の高い集団のベン図
浅谷 (2020) らの先行文献から筆者作成

片っ端からメッセージを送った」と述べている⁽¹⁹⁾。

この反面、中高生や、学校に通えない不登校生徒が、X (旧 Twitter) の投稿で他者と交流を行うメリットもある。関 (2023) は、「X (旧 Twitter) は、リアルな人間関係とは必ずしも紐づいていない。(中略) したがってリアルな人間関係とは無関係に、自分と趣味や考え方が似た人物を探しやすい構造になっている。自分と同じように学校に行けない子どもたち同士でつながることもできるし、自分になりたいキャラになることもできる。」と述べている⁽²⁰⁾。

リアルな世界では、なかなか見つけることができなかった、「同じ趣味」「似たような考え方」「境遇」は、X (旧 Twitter) の検索機能から容易に「仲間」を見つけることができる。さらに、このようなやりとりの開始や繋がりは、学校で悩みを抱える中高生、不登校の生徒たちにとって、「喜び」(石田光規 2022)⁽²¹⁾ であるとも言え、急速に個人的なやりとりが開始されることも想像に容易い。この上で、X (旧 Twitter) での不登校生徒のやりとりは、「繋がり」である居場所と、その周囲を取り囲むように (図2) 常に何らかの犯罪リスクの高い「加害者」の存在があることについて、継続的で十分な検討が必要であるといえる

3) X (旧 Twitter) のコミュニケーションから「出会い行動」に至る要因

前節で述べた通り、X (旧 Twitter) でのコミュニケーションは、不特定多数に向けた、「オープンなコミュニケーション」で見知らぬ相手同士でやりとりを行う形もあれば、「DM」を利用した、犯罪リスクの高い、個人対個人の親密なコミュニケーションの形がある。このことから、中高生が、SNS 上でのやりとりから、実際に見知らぬ相手と「出会う行動 (以下出会い行動)」に至るには、どのような要因があるか検討が必要である。本節では、X (旧 Twitter) のコミュ

ニケーションから「出会い行動」に至る要因について検討する。

先行研究によると、中高生が、X (旧 Twitter) における SNS の交流から「出会い行動」に至る要因として、①学校の所属感のなさ②現実世界のストレス・孤独感③「同じ趣味」「お互いに共通する話題」を継続してやりとりした相手と出会いやすい、等が推測される。

まず、①学校の所属感のなさについて、青山郁子 (2016) によると、学校での所属感が低く、バーチャルな人間関係への親近感を持つ子どもは、インターネット上のコンタクトリスクが高いことが証明されている⁽²²⁾。さらに、前節で述べた羽淵 (2022) の、家族関係、友人関係、学校などの日常的な生活の場における居心地が良くない場合、それらの空間以外へと人間関係を拡大していく若者の存在が確認されてきたとある⁽⁴⁾。この、「それらの空間以外への人間関係の拡大」は、SNS やネット上での友人や仲間づくりも含まれると言える。

次に、②現実世界のストレス・孤独感に関し、藤・村上ら (2014) によると、「現実世界の対人関係から出会い行動というモデルを想定し、共分散構造解析により検討すると、現実世界における孤独感及び対人ストレスは、出会いに対する危険性の認知を抑制し、同時に優位性や利便性の認知を促進しつつ出会いへの興味を増大させ最終的に出会い行動を促進させる」⁽²³⁾ ことを明らかにしている。SNS 上で見知らぬ相手とコンタクトをとることに抵抗が低い若者の増加に加え、学校での所属感の低さや日常のストレスは、SNS 上での見知らぬ相手と実際に「出会う」行動に至る大きな要因であることがわかる。

また、中高生や 10 代の若者の X (旧 Twitter) 投稿に関連し、佐々木祐一 (2016) の調査によると、10 代後半層の投稿内容は、他の世代に比べ、「腹立たしい」「疲れた」「暇だ」といった否定的感情や、カタルシスをもたらす感情を表現する投稿が極めて多いとある。これに加え、この年代においては、「ストレスを発散したい」と思ったときに投稿する行為に結びやすいことが明らかになっている⁽²⁴⁾。X (旧 Twitter) で自己の感情を投稿することは、ある種のストレス発散につながると推測される。

最後に、③の「同じ趣味」「お互いに共通する話題」を継続してやりとりした相手と「出会い行動に至る」ことに関し、仲嶺誠 (2019) は、高校生たちが SNS で見知らぬ異性と対面で出会うにあたり、「お互いに共通する話題や趣味や嗜好を継続してやりとりした相手」が、対面で会う理由として有効であることを明らかにしている。これに加え、仲嶺 (2019) は、「出会う行為」をしたものは、「自分が会いたい」から相手から連絡先を聞き選別して会っている可能性があり、本人は危険だと思っていない (あるいはリスクヘッジされていない) とも指摘している⁽²⁵⁾。

このような「共通の趣味」におけるコミュニケーションからの「出会い行動」は、「いつも SNS で共通の趣味や話題について対話しているので、“悪い人”ではないはずである」といった、前述した仲嶺 (2019) らが指摘する「会いたい人を自分で選ぶためリスクヘッジされていない」ことに至るのは想像にたやすい。だが、近年の SNS を介したネット犯罪では、加害者が、SNS 上で「同じ趣味の仲間」に「なりすまし」、中高生の誘い出しや恐喝の事件に至るケースが

存在する⁽²⁶⁾。(文科省 2017)。

以上のことから、中高生が、SNSやX(旧Twitter)を通じ「出会い行動」に至る過程は、ストレスや孤独といった要因に加え、前節でも述べたが、「同じ趣味」「同じ境遇」といった親密性からも「出会い行動」に至ることが明らかになっている。さらに、X(旧Twitter)「#不登校さんと繋がりたい」の投稿は、他の「繋がりたい」投稿と比較し、「自己紹介カード⁽²⁷⁾」を用いた、詳細な自己プロフィールや、趣味の投稿などを通し仲間を求めている。このような投稿だけで、即座に「出会い行動」につながるとは言いがたいが、中高生や不登校生徒の「共通の趣味」「同じ境遇」における、SNSやネットを介した出会い行動のプロセスやそのリスクについて今後も慎重な検討が必要であるといえる。

4) なぜ中高生はX(旧Twitter)による性被害が多いのか

ここまで、中高生や若者、不登校生徒のSNSやX(旧Twitter)の投稿やコミュニケーションの特徴や「出会い行動」に至るまで先行文献から検討した。本節では、実際のSNSを介した性被害ケースの主なケースから、中高生のX(旧Twitter)による性被害に関し検討・考察する。

文科省・警視庁は、『改訂「生きる力」を育む健康教育の手引き⁽²⁸⁾』(文科省 2020)や、「性犯罪・性暴力対策の強化の方針⁽²⁹⁾」(内閣府 2020)の中で、中高生が実際にSNSを介した性被害にあう主なケースとして、①加害者側の「なりすまし」②被害児童による自撮り画像の投稿と脅迫③相談からの誘い出し「いわゆるグルーミング行為」があげられる。

まず、①加害者側の「なりすまし」とは、加害者が、中高生とのコミュニケーションや出会いを目的に、SNSやネット上で中学生や高校生に「なりすまし」接触をはかる事例である。このようなケースは、加害者は、言葉巧みに年齢や性別すらも変え、SNS上で「なりすまし」を行い、中高生に接触する。中高生や不登校生徒が、SNS上で、個人のプロフィール、例えば「中学生」「高校生」「女子」「男子」などを開示し、友人を求めることは、ネットで同世代や同じ境遇にある友人を探すことが容易にできるといえる。一方で、これは可能性として、加害者側が「なりすまし」架空の中高生と接触するリスクもある。このため、中高生や不登校生徒が、SNS上で友人を求めることは、常に「SNSを介した性トラブルにあうリスク」にあると推測される。

次に、②被害児童による自撮り画像の投稿と脅迫の被害事例としては、警視庁(2021)によると「児童が自らを撮影した画像に伴う被害」または、「だまされたり、脅されたりして児童が自らの裸体を撮影させられた上、メール等送らせられる被害」をいう⁽³⁰⁾。SNS上で友人になった相手から脅迫され、被害者が自撮り画像を送るケースがある。一方、近年では、中高生自らが、SNSやネット上で自撮り画像や自撮り動画を投稿し、これを通じ加害者側から接触があり、その結果被害にあうケースも増加している⁽³¹⁾(警視庁 2022)。

最後に、③相談からの誘い出し「いわゆるグルーミング行為」は、SNSやネット上で、「家出したい」「相談に乗ってほしい」「死にたい」といった心の吐露を投稿し、加害者から「相談に

乗る」といったやりとりや誘い出しを被害者が受け、この結果被害にあうケースである。前節でも述べたが、「座間市男女9人殺害事件」(渋井 2019)は、被害者の「相談」「死にたい」といった投稿を、加害者が検索し、起こった事件である。

以上のようなケースに加え、X (旧 Twitter) の利用規約は13歳から(北村 2016)である⁽³²⁾。若者のスマートフォンの専有化が低年齢化し、中高生が、X (旧 Twitter) を、家庭・学校・既知の友人以外の、いわゆる「閉鎖的な自分だけのネット空間」で利用できることも大きな要因であるといえる。これらをふまえ、X (旧 Twitter) における一部の不登校生徒による「#不登校さんと繋がりたい」投稿に関しても、SNS を介した性トラブルリスクについて、分析と検討が必要である。

3. 方法と結果

前節での先行文献、予備調査から、本稿では、X (旧 Twitter) 「#不登校さんと繋がりたい」投稿の内容分析に加え、「#中高生と繋がりたい」投稿の内容分析との比較により、「不登校生徒の SNS を介した性トラブルリスク」に関して検証することを目的とし、調査を実施した。

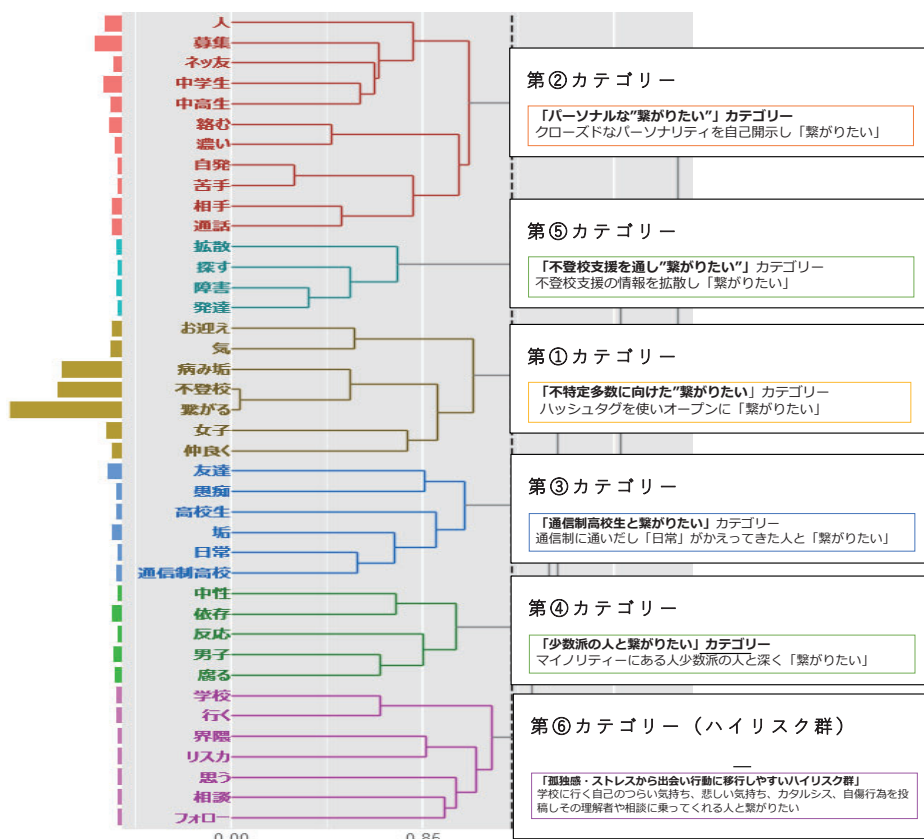
データ収集方法として、鳥海不二夫 (2020)⁽³³⁾、四方田健二 (2020)⁽³⁴⁾らによる X (旧 Twitter) での新型コロナウイルスや、災害時における人々の感情分析を参考に、Twitter API Python3.9 (MacOS) から Get-tweet date を用いデータを収集した。データ収集したツイート投稿内容は、KH Coder (樋口耕一 2017)⁽³⁵⁾ で内容分析を行った。調査期間は、予備調査期間も含め 2021 年 12 月 28 日～2022 年 8 月 26 日までである。これらの X (旧 Twitter) 投稿内容の保管・保護・使用にあたっての倫理に関しては、ジョージ・ワシントン大学の SNS データを用いる倫理指針 (2020)⁽³⁶⁾ のもとデータ収集と分析を行った。

1) 「#不登校さんと繋がりたい」「#中高生さんと繋がりたい」から抽出・分析した階層的クラスタ分析

X (旧 Twitter) から収集した「#不登校さんと繋がりたい」は、1003 アカウントであった。これらをデータ収集し、Twitter API Python3.9 (MacOS)、KH Coder (樋口 2017) で 19,053 の文言を抽出した。さらに、この抽出された文言の「階層的クラスタ分析」(樋口 2017)⁽³⁷⁾を行った。この結果、「#不登校さん繋がりたい」において、それぞれの目的・ニーズに分かれた6つのクラスタが抽出された(図3)。また、同様の方法で比較を行うため、「#中高生と繋がりたい」の投稿を収集した。収集したアカウントは、393 アカウント、KH Coder (樋口 2017) で抽出された総抽出語数は 21,757、使用言語は 8593 であった。

樋口ら (2017) は、KH coder の「階層的クラスタ分析」においてカテゴリ分けをする際、1つ1つの文言をより深く読み込むことができる「KWIC コンコーダンス」を用いた解析を推奨し

ている。このため、本稿においてもクラスター分けされたすべての文言に関し、「KWIC コンコーダンス」を用いた解析を行い、「# 不登校さんと繋がりたい」のカテゴリー分けを行った (図3)。



(図3) X (旧 Twitter) 「# 不登校さんと繋がりたい」
階層的クラスター分析より抽出されたカテゴリー

まず、「# 不登校さんと繋がりたい」投稿より抽出された文言の数が多い順にあげると、第①カテゴリーは、「# 不登校」「# 繋がる」「# 病み垢」といった、ハッシュタグを使いオープンなコミュニケーションとして自己開示をする、「繋がりたい」カテゴリーである。例えば、「不登校です」「友達になってください」といった自己紹介を投稿した後に、ハッシュタグをつけ検索されやすいよう投稿する、「不特定多数に向けた繋がりたい」カテゴリーであった。

次に、第②カテゴリー「パーソナルな“繋がりたい”カテゴリー」では、「# 中学生」「# 女子」といった個人の情報や、ハッシュタグを用いた投稿に加え、「頻繁にやりとりがしたい」「自分から他の X (旧 Twitter) アカウントへ声をかけるのが苦手なので、声をかけてほしい。友達になってほしい。」といったクローズドなパーソナリティーを開示した「繋がりたい」カテゴリーであった。さらに、このカテゴリーには「通話」という文言も抽出された。解析すると「頻繁にやりとりをし、仲良くなれば、“通話”で話がしたい」といった、自己を開示したうえで、

さらに深いやり取りを求める投稿が抽出された。

第③カテゴリーの「通信制高校生と繋がりたい」カテゴリーは、「# 不登校さんと繋がりたい」投稿の一部には、「不登校の状態から通信制高校に通い始めた」といった投稿もあり、これらがクラスターとして抽出された。さらに、このカテゴリーにおいては、「日常垢」とハッシュタグをつけた文言も多く抽出された。第①カテゴリーのクラスターでは、「# 病み垢」といった投稿が多い反面、この第③カテゴリーでは「# 日常垢」、つまり、不登校の状態ある「病み」から「日常」にもどってきたといった意味で、「日常垢」と投稿していることが推測された。

第④カテゴリーは、「中性」といった自己のジェンダーや、セクシャルマイノリティを開示し、仲良くなれる人は、ツイートに「いいね」や、リツイートといった「反応」をしてほしいといった「少数派の人と繋がりたい」カテゴリーであった。さらに、このクラスターからは「腐る」といった文言が多く抽出された。これを解析すると、「腐女子」「腐男子」といった、一般的に少数派の共通の趣味をもった友人を求める文言があった。このため、「マイノリティーにある少数派の人と深く“繋がりたい”」カテゴリーとした。

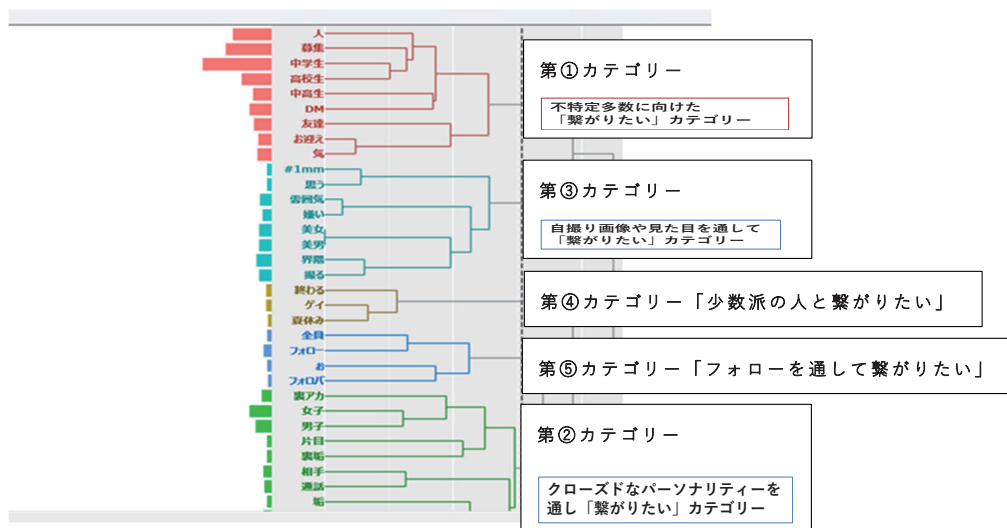
第⑤カテゴリーは「不登校支援の情報を拡散し“繋がりたい”」カテゴリーであった。このカテゴリーは、フリースクールや、不登校の支援を運営している NPO 団体などが、X (旧 Twitter) で宣伝や広報を行い、「不登校支援を X (旧 Twitter) で拡散する“繋がりたい”カテゴリー」であった。このカテゴリーは、フリースクール、不登校の支援を運営している NPO 団体などが、X (旧 Twitter) で宣伝や広報を行い、「不登校支援を X (旧 Twitter) で拡散する“繋がりたい”カテゴリー」であった。

第⑥カテゴリーは、カテゴリーの中に、「学校」「行く」といった文言に加え、「リスカ (リストカット)」「界限」といった文言も抽出された。まず、この「行く」を解析すると、「学校に行きたくない」「学校に行けない」といった、自己のカタルシスを投稿している文言が多くあった。

さらに、このカテゴリーから抽出された「界限」を解析すると、「自撮り画像界限」「自撮り界限」「片目界限 (片目だけの画像の投稿)」といった、自撮り写真に加え、中にはリストカットの画像投稿が推測される文言も抽出された。また、このカテゴリーでは、「相談」という語の抽出が特徴的である。この「相談」の文言を解析すると、「相談に乗ってほしい」パターンと、悩みを抱えている中高生に対して「相談に乗る」と投稿された両方のパターンがみられた。

以上のことから、この第⑥カテゴリーは、①学校に行く・行けないストレスや孤独といった投稿②「リストカット」や自傷行為の投稿③「自撮り画像」の文言が他のカテゴリーより多い④「相談」といった文言から、前述した「いわゆるグルーミング行為」がカテゴリーに存在する可能性があることから「孤独感・ストレスから性被害にあうリスクの高いハイリスク群」とした。

次に、「# 中高生と繋がりたい」投稿 393 アカウント、KH Coder (樋口 2017) で抽出された総使用言語は 8593 で同様に階層的クラスター分析を行った。その結果、5つの「繋がりたい」目的に分かれたカテゴリーが抽出された (図 4)



(図4) 階層的クラスター分析「#中高生と繋がりたい」目的に分かれたカテゴリー

この結果、「#不登校さんと繋がりたい」で抽出された、「学校」「相談」「リスカ」といったハイリスク群の文言は抽出されなかった。これらと同様のカテゴリーとしては、①不特定多数と繋がりたいカテゴリー②クローズドなパーソナリティーを通し繋がりたいカテゴリー④少数派の人と繋がりたいカテゴリーであった。これに加え、「#中高生と繋がりたい」独自のカテゴリーとして、自己の「自撮り」や写真の「雰囲気」「界限」といった文言から、③自撮り画像を通して繋がりたいカテゴリーが抽出された。

2) クラスター分析から抽出した「ハイリスク群」の解析

前節において抽出された、「#不登校さんと繋がりたい」における、第⑥カテゴリー「孤独感・ストレスから“出会い行動”に移行しやすいハイリスク群」に関し、より深い分析・検討を行うため解析を行った。まず、このハイリスク群において、使用された文言が明らかになった、「ハイリスク文言がある投稿」と「ハイリスク文言がない投稿」を抽出し、語の特徴的な単語を分析・比較するため、KH coder (樋口 2017) による Jaccard の類似性測度⁽³⁸⁾ からそれぞれの特徴的な単語を抽出した (表1)。

この結果、「ハイリスク文言がある」投稿には、「行く」「病み垢」「仲良く」「界限」といった文言が抽出された。この「行く」に関し KWIC 解析 (樋口 2017) で文脈を探ると、「学校に行く」または、「学校に行けない」といった文言が関連単語として強く抽出された。さらに、フォローに「行く」，“いいね”をつけてくれたら、「お迎え」に「行く」といった、SNS 上で「即座に仲良くなりしたい」といった関連単語が抽出された。また、「ハイリスク文言」においては、「#不登校さんと繋がりたい」といった投稿にもかかわらず、「不登校」の文言は関連単語とし

ク文言あり」群の文言と、「ハイリスク文言なし」群両方のカテゴリにおいて共通に使用された言語は、「繋がる」「女子」であった。

次に、「ハイリスク文言あり」群においては、特徴的な抽出語として、「相談」「RT⁽¹⁵⁾」「自己紹介カード」といった抽出語があった。さらに「自傷」「死」「リスカ (リストカット)」といった自傷や死といった自己への傷つけの語の抽出があった。また、「フォロー」「RT」「今日」「仲良く」といった、気に入った相手であればすぐにフォローなどでつながりを持ちたいといった投稿が多いことが解析から明らかになった。

また、この「ハイリスク文言あり」投稿の特徴として、同一アカウントが、何度も同じ内容を投稿しているパターンがみられた。例として、「繋がりたい」「すぐにフォロー」「投稿に“いいね”をつけてくれたら、フォローに行く」と、1日何度も、SNS上ですぐに繋がりを持てる友人が得られるまで、同じ内容を投稿しているパターンが複数みられた。以上の対応分析から、結果として、「ハイリスク文言あり」の投稿と、「ハイリスク文言なし」の投稿は、その内容、目的、投稿のパターンも全く違う様相であることが明らかになった。

4. 考察

まず、本稿の分析で行った、X (旧 Twitter) 「# 不登校さんと繋がりたい」から抽出された、性トラブルリスクの高い「ハイリスク群」の解析や、「階層的クラスター分析」(樋口 2017) 結果から、X (旧 Twitter) 「# 不登校さんと繋がりたい」の投稿は、SNS上でより自己の境遇に近い、理想の仲間や友人を求めることが明らかになった。さらに、(表1) の「ハイリスク群」を抽出した関連文言には、「不登校」の文言が全くなかった。これは、不登校生徒である・不登校生徒でないにかかわらず、自分を理解してくれる「人」と繋がりを持ちたい様相が推測される。これに加え、「ハイリスク群」には、「自己紹介カード」での自己の開示や、すぐに「フォロー」をしてほしい、といったSNS上で急速な「繋がり」を求める投稿が明らかになった。この一方で、「# 中学生と繋がりたい」の階層的クラスター分析 (図4) においては、このような「ハイリスク群」の文言は抽出されず、「自撮り」「写真」「美女」といった見た目や、投稿した写真から繋がりを求めるカテゴリが抽出された。これらのことから、「# 不登校さんと繋がりたい」と「# 中高生と繋がりたい」階層的クラスター分析は、カテゴリが同じものもあれば、全く違う様相の投稿があることも明らかになった。

これに関連し、警視庁 (2022) の最新の調査によると、中高生のSNSを介した性被害にあう「最初のきっかけ」は、被害者側の「自撮り写真」の投稿より、「自己のプロフィール投稿」が倍以上であることが明らかになっている。つまり、「# 不登校さんと繋がりたい」投稿は、「# 中高生と繋がりたい」と比較し、自己のプロフィールや、「自己紹介カード」を用いた投稿が多く、今後より検討が必要であるといえる。

さらに、階層的クラスター分析において「ハイリスク群」に抽出された文言は、「学校に行く」「学校にいけない」といった葛藤を抱えた投稿と共に、「リスカ (リストカット)」「死」といった自己を傷つける文言が散見された。さらに、これらの文言と関連の強い語が、「相談」である。これらは、X (旧 Twitter) 上で思春期向けの相談機関が「相談に乗る」と投稿するパターンと、その運営機関が不透明なであるにも関わらず、連日「相談してください」と投稿されているパターンが解析から明らかになった。この「相談」について検証の可能性の1つに、加害者が「相談」を受けることにより、被害者を誘い出す事件「チャイルド・グルーミング (いわゆるグルーミング行為)」が示唆される。

この「チャイルド・グルーミング」は、我が国では明確な概念や規定はないものの、内閣府 (2014) ⁽³⁹⁾ の「青少年のインターネット利用環境に関する実態」の「アメリカにおける実態」においては、以下のように述べている。「インターネットを利用した児童に対する性的誘因は、チャットルーム内などで児童の警戒心を解き、手なずけるチャイルド・グルーミング (Child grooming) と呼ばれる心理的過程をへて行われる。誘引者は、自分が望むような行動をとってくれそうな児童や、自尊心が低い児童、家庭に問題のある児童を狙うとされる」とある。この「相談」がハイリスク群に多く文言が出現していることは、本来の「相談に乗る」機関とは別に、このような性トラブルリスクが起こる可能性が示唆される。

土井隆義 (2018) は、「学校内の人間関係や居場所を確保することに失敗した者たちは、その代替をネットの中へ求めようとする傾向を強めてもいる。いわゆる自撮りを発端とした性被害に遭ってしまう若者には、このような事情を抱えている者が多く見られる。ようやく自分を承認してくれる相手と居場所を見つけられたと思込んでいるため、もうけっしてそれを手放すまいと躍起になり、やがて深みにはまっていってしまうのである」⁽⁴⁰⁾ とある。さらに、このような関係は、閉鎖的な、浅谷 (2020) らが指摘した「クローズドなコミュニケーション」でやりとりが行われる可能性が高く、学校や支援者、保護者の目に触れにくいことも推測される。

文科省や警視庁が、これまで強い姿勢で施策を行ってきた「子どもの性被害防止プラン 2022」において、「SNS に起因する事犯」の総数は、2019 年をピークに減少傾向にあり、一定の効果が得られている。しかし、「重要犯罪における被害児童の推移」は年々著しく上昇している。これは、本稿で解析した「ハイリスク群」のような投稿からの表在化しにくいやりとりや、加害者側からの巧妙な「誘い出し」も示唆される。これに加え、内閣府 (2023) が指摘する「特に子どもや若者は、被害に遭っても、それを性被害であると認識できないことや、加害者との関係性などから誰にも相談できず、被害が潜在化、深刻化しやすい」⁽⁴¹⁾ ことも大きな要因であるだろう。

さらに、「ハイリスク群」と「ハイリスク群でない」投稿に対応分析において、両方のカテゴリーにおいて共通に使用された言語は、「繋がる」「女子」であった。「繋がる」といった文言に関しては、「# 不登校さんと繋がりたい」の X (旧 Twitter) 投稿であるため、当然の結果であ

るといえよう。しかし、「女子」という文言が共通して多く用いられる理由として①「女子」がネット上での友人を求めること②加害者側が「女子」を検索すること、この双方が示唆される。

これまで、中高生のSNSの性被害調査において、被害者の性別の割合は公表されていない。このため、この本稿のデータで抽出された「女子」に関して、前述した性被害がより「潜在化」しやすい⁽⁴¹⁾「男子」(内閣府 2023)との比較検討も喫緊の課題であるといえよう。

5. 結語

2023年7月、Twitterは「X」に名称が変更された。140文字の投稿や、匿名性、拡散性に変容はみられないものの、今後X(旧Twitter)の投稿は、有償化の動きも示唆されている。これに相まって、本稿の調査において、多い時では1日50～60件を数えた「#不登校さんと繋がりたい」投稿は、現在1日20件程度と減少している。これは、単にX(旧Twitter)の投稿が減少したことに加え、別のSNSやDiscordをはじめとするネットコミュニケーションサービスに移行していることが推測される。

原清治⁽⁴²⁾(2022)は、子どもたちのネットいじめやオンラインゲーム、SNSコミュニケーションのトラブルにあたり、「これまで教育の世界は、先生が先を走り、後から子どもたちが追いかけてくる構図であったが、デジタルでは全くの逆になっている。先に子どもたちの実態があり、それを教員と親たちは後ろから追いかける形である。これは教育の世界で初めての経験だ。だからこそ、我々が予見できないことが起きると意識が必要である。」と述べている。

若者や子ども達が利用するSNSサービスやネットコミュニケーションは、X(旧Twitter)のように、早いペースで変遷する。このため、このような数々のトラブルを、「学校」または「家庭」のみの問題として抱えては、本稿で明らかになった性トラブルや犯罪リスクの高い、グルーミング被害をはじめとする閉鎖的なコミュニケーションを察知し、支援することも困難である。

いま、自宅で大半の時間を過ごす我が国の不登校生徒にとって、SNSやインターネットは、「体験」や「学習」、同じ境遇にある「仲間づくり」や、「居場所」として大きな役割を示す。だからこそ、不登校生徒の「居場所」を守りつつ、安全にSNSやネット、ゲームなどで他者との交流や安全な「繋がり」を検討し、支援することが必要であるといえる。

本稿の課題として、本稿の対象は、SNSやX(旧Twitter)投稿のみの分析である。今後、不登校生徒のSNSを介した性被害に関し、より実証的な調査や検証が必要であるといえる。

[注]

- (1) 山田 智子・原 清治 2022「不登校生徒の SNS コミュニケーションと啓発に関する研究—Twitter”#不登校さんと繋がりたい”に着目して—」日本教育実践学会 第 25 回研究大会 自由研究発表
- (2) X (Twitter) は, アメリカでスタートしたミニブログとも呼ばれるサービス。日本語では 140 文字, 英語などは 280 文字の制限がある。他人の投稿を自分のフォロワーに公開・共有する仕組みはリポストと呼ばれ, 拡散力が大きいことで知られる。文字投稿以外に, 写真・動画・位置情報の投稿も可能である。2023 年 8 月に Twitter から「X」に名称が変更された。本稿の調査時点では Twitter であったため, X (旧 Twitter) と表記する。
- (3) 吉井 健治 1998「学校教育構造と不登校問題:「なかま」による癒しと成長」社会関係研究 第 4 巻 pp.11-14
- (4) 羽瀨 一代 2022「出会い文化の変遷 マッチングアプリに至る途」2022 林 雄亮・石川由香里・加藤 秀一(編)『若者の現在地 青少年の性行動全国調査と複合的アプローチから考える』顕草書房 p.189
- (6) 警視庁 2022「SNS に起因する事犯」被害児童数の推移「なくそう, 子どもの性被害」関係統計 (https://www.npa.go.jp/policy_area/no_cp/statistics/ 2023 年 7 月 23 日取得)
- (7) 警視庁 2021「SNS に起因する事犯」被害児童数が多いサイト「なくそう, 子どもの性被害」関係統計 (https://www.npa.go.jp/policy_area/no_cp/statistics/ 2022 年 5 月 3 日取得)
- (8) 文部科学省 2022 年 10 月 27 日「令和 3 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」p.1 (https://www.mext.go.jp/content/20221021-mxt_jidou02-100002753_1.pdf 2022 年 11 月 5 日取得)
- (9) 文部科学省 2023 年 3 月 31 日「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策「COCOLO プラン」(概要) (https://www.mext.go.jp/content/20230418-mxt_jidou02-000028870-bb.pdf 2023 年 8 月 5 日取得)
- (10) 文部科学省 2017 年 2 月 13 日「不登校児童生徒による学校以外の場での学習等に対する支援の充実～個々の児童生徒の状況に応じた環境づくり～」報告 pp.5-10
- (11) 文部科学省 2021 年 10 月「不登校児童生徒の実態把握に関する調査報告書」p.57 (https://www.mext.go.jp/content/20211006-mxt_jidou02-000018318_03.pdf 2023 年 8 月 19 日取得)
- (12) 関 正樹 2023『子どもたちはインターネットやゲームの世界で何をしているんだろう? - 児童精神科医からみた子どもたちの「居場所」』金子書房 pp.34-45
- (13) 関 正樹 2023 前掲書 p.227-239
- (14) 桐村 喬 2019「ジオタグ付きツイート情報とその取得」桐村 喬『ツイッターの空間分析』2019 古今書院 p.2
- (15) あるアカウントをフォローすることにより, そのアカウントが発信したツイートをタイムラインで読むことができることが「フォロー」, 他のアカウントからフォローされた時が「フォロワー」という。X (Twitter) の大きな特徴として, 他の SNS と違い「友達申請」がなくてもフォロワーになれることである。(北村ら 2016)
- (16) 「リポスト」とは, 他のアカウントのツイートをタイムラインに表示させること。拡散力はリポストがついた数に比例して非常に大きい。かつて Twitter では「リツイート」「引リツ (引用リツイート)」「RT」と呼称されていた。
- (17) 浅谷 公威・川原 素子・鳥海 不二夫・坂田 一郎 2020「Twitter におけるクローズドなコミュニケーションへの誘発過程の解析と危機的検知」人口知能学会研究会資料知識ベースシステム研究会 119 回 pp.12-15
- (18) 洪井 哲也 2019「座間市男女 9 人殺害事件にみる, 自殺とネットコミュニケーション」紀要社会学・社会情報学第 29 号 pp.107-123

- (19) 東京新聞 WEB 「心弱っている子狙った」座間9人殺害2年 白石被告, 面会応じる
(<https://www.tokyo-np.co.jp/article/18989> 2022年11月20日取得)
- (20) 関正樹 2023 前掲書 p.38
- (21) 石田光規 2022 『「人それぞれ」がさみしい「やさしく冷たい人間関係を考える」』 pp.132-144
- (22) 青山郁子 2016 「高校生のインターネット上でのコンタクトリスク行動と防御要因・リスク要因の検討」日本教育工学会論文誌 pp.001-004
- (23) 藤桂・村上達也・西村喜久磨 2014 「インターネットを介した出会いを求める心理過程 - 出会いに対する態度に着目して -」教心第6回総会 p.460
- (24) 北村智 2016 『ツイッターの心理学』 pp.40-43 誠信書房
- (25) 仲嶺誠・田中伸之介・上條菜美子 2019 「高校生がSNSで知り合った異性と対面で出会うまでのやりとり」社会情報学 第8巻 第2号 p.162
- (26) 文部科学省 2017 「ネットを通じた子供の性被害の防止に向けた, 国家公安委員会委員長との共同メッセージの発信及びリーフレット流布について」(https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/ikusei/1386963.html 2022年5月21日取得)
- (27) ネットには, X (旧 Twitter) に自分で作成し, 投稿するあらゆる「自己紹介カード」が存在する。(例えば「不登校さん用自己紹介カード」「Twitter用自己紹介カード」など)である。作成の方法は, 用途にあった「自己紹介カード」を選び, インターネット上で記入し, 作成したものを写真(スクリーンショット)で撮影し, X (旧 Twitter) に写真として投稿する。この自己紹介カードに入力した文言は画像であるため, 普通のツイート投稿のように「#中学生」「#高校生」「#不登校」と入力しても, ハッシュタグや文言の検索を他者ができないようになっている。
- (28) 文部科学省 2020 『改訂「生きる力」を育む中学校保健教育の手引き』 p.66
(https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/1354075.html 2021年4月29日取得)
- (29) 内閣府 2020 「性犯罪・性暴力対策の強化の方針」性犯罪・性暴力対策強化のための関係府省会議
(https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/seibouryoku/pdf/policy_02.pdf 2021年5月10日取得)
- (30) 警視庁 2021 「なくそう, 子どもの性被害」関係統計「SNSに起因する事犯」被害児童数の推移
(https://www.npa.go.jp/policy_area/no_cp/statistics/ 2022年5月3日取得)
- (31) 警視庁 2021 「なくそう, 子どもの性被害」関係統計「児童ポルノ事犯」被害児童数の学識別・被害態様別の割合
(https://www.npa.go.jp/policy_area/no_cp/statistics/ 2022年5月3日取得)
- (32) 北村智 2016 前掲書 pp.40-43
- (33) 鳥海不二夫・榊剛史・吉田光男 2020 「ソーシャルメディアを用いた新型コロナ禍における感情変化の分析」人口知能学会論文誌 35巻 (2020) 4号 pp.1-7
- (34) 四方田健二 2020 「新型コロナウイルス拡大に伴う不安やストレスの実態: Twitter 投稿内容のテキスト分析から」体育学研究 65巻 (2020) pp.757-774
- (35) 樋口耕一 2021 『社会調査のための計量テキスト分析・内容分析のための継承と発展を目指して』 PP.35- PP.39 ナカニシヤ出版
- (36) UniversityLibrariesOnline2020 (https://gwulibraries.github.io/sfui/resources/social_media_research_ethical_and_privacy_guidelines.pdf Washington 2021年10月6日取得)
- (37) 樋口耕一 2021 前掲書 pp.11-13
- (38) 樋口耕一 2021 前掲書 p.180
- (39) 内閣府 2014 「平成25年度 アメリカ・フランス・スウェーデン・韓国における青少年のインターネット環境整備状況等調査」(https://www8.cao.go.jp/youth/youthharm/chousa/h26/gaikoku_

html/2_1_1_3.html#a2-1-1-4-12022 年 11 月 20 日取得)

- (40) 土井 隆義 2018 「流動化する社会関係, 固着化する仲間集団 - 若者のネット依存をめぐる虚と実」
日本情報教育学会誌 Voil No1 pp20-21
- (41) 内閣府 2023 「子ども・若者の性被害防止のための緊急対策パッケージ」
(https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/seibouryoku/pdf/boushi_03.pdf 2023 年 8 月 5 日取得)
- (42) 朝日寺子屋 「”悪質性高まっている” 佛教大・原清治教授が語るネットいじめの現状」
(<https://terakoya.asahi.com/article/14610469> 2022 年 11 月 30 日取得)

(やまだ ともこ 教育学研究科生涯教育専攻博士後期課程)

(指導教員：原 清治 先生)

2023 年 9 月 30 日受理